東京外国語大学　附属図書館　第１３回特別展示

風刺画の妙：モッラー・ナスレッディンの批判精神

ー中央アジア学へのいざないー

モッラー・ナスレッディン
は中央アジアからトルコまで、トルコ系の人々の間
に伝わる有名なとんち話の主人公で、同紙のカラフルな風刺画
にもその姿が登場する。本学アジア・アフリカ言語文化研究所の所蔵する
１９０６～１９０７年のコレクションから見える、その旺盛な批判精神とは？

ごあいさつ

東京外国語大学附属図書館では、毎年秋に特別展示を行い、本学の所蔵する資料の数々をさまざまな切り口から紹介し広く社会に公開しております。

府中キャンパス移転後、特別展示第 13 回を数える本年は、『風刺画の妙：モッラー・ナスレッディンの批判精神　―中央アジア学へのいざない』と題し、20 世紀初頭に帝政ロシア領内のムスリム地域の一つであるコーカサス地方で創刊された週刊雑誌「モッラー・ナスレッディン」（本学アジア・アフリカ言語文化研究所所蔵)をその風刺画にスポットを当てながら紹介します。

本学は今年より外国語学部から言語文化学部・国際社会学部の 2 学部への改組を行うとともに、わが国屈指の「地域研究の教育拠点」をめざして、中央アジア・アフリカ・オセアニアを対象地域に加えました。これを記念した当展示をご覧いただき、その豊かなユーモアを楽しみ鋭い批判精神を活き活きと感じながら、近年わが国でも関心の高まりつつある中央アジア学の世界へ皆様をお誘いできれば、主催者として喜びに堪えません。

展示にあたって、小松 久男 本学大学院総合国際学研究院特任教授にご指導と解説文を賜りました。小松先生にはあわせて公開講演会をお願いしております。

また、本学アジア・アフリカ言語文化研究所には資料出陳・デジタルアーカイブ画像使用の許可をいただきました。

以上の各位に厚くお礼申し上げます。

2012 年 11 月 21 日

東京外国語大学附属図書館長

栗　田　　博　之

≪特別展示≫

期間：2012 年 11 月 21 日（水）～12 月 23 日（日・祝）　(※11/25 を除く。)

平日 9:00-21:45　(※11/21-24,26 は 17:00 まで)、土・日 13:00-18:45

※入館は終了 15 分前まで

会場：東京外国語大学 附属図書館 2 階ギャラリー

≪公開講演会≫

講師：小松久男（本学特任教授）

演題：風刺画の妙：モッラー・ナスレッディンの批判精神　――中央アジア学へのいざない

日時：2012 年 12 月 6 日（木）16:30-18:00　本学アゴラ・グローバル　プロメテウス・ホール

「風刺画の妙：モッラー・ナスレッディンの批判精神―中央アジア学へのいざない」展示資料解説

本学特任教授　小松久男

日露戦争のさなかに起った 1905 年革命の後、帝政ロシア領内のムスリム地域では多数の新聞・雑誌が誕生し、ジャーナリズムの時代が始まった。参考の地図には 1917 年の二月革命前後にムスリムの定期刊行物が出された都市と刊行物の数が■と□で示されている [図 1] 。これを見ると、石油産業の発展したバクーでの刊行点数が群を抜いていたことがわかる。これらの定期刊行物は多種多様な内容をもっていたが、その中でもコーカサス総督府の所在するティフリス（今はグルジアの首都トビリシ）で創刊された週刊雑誌『モッラー・ナスレッディン』は、機知に富んだエッセイや詩、そしてとりわけカラフルな風刺画を駆使して政治や社会の諸問題に鋭利な批判を加えて異彩を放った。今回は、本学アジア・アフリカ言語文化研究所の所蔵する 1906～1907 年のコレクションに見える、その旺盛な批判精神に注目してみたい。

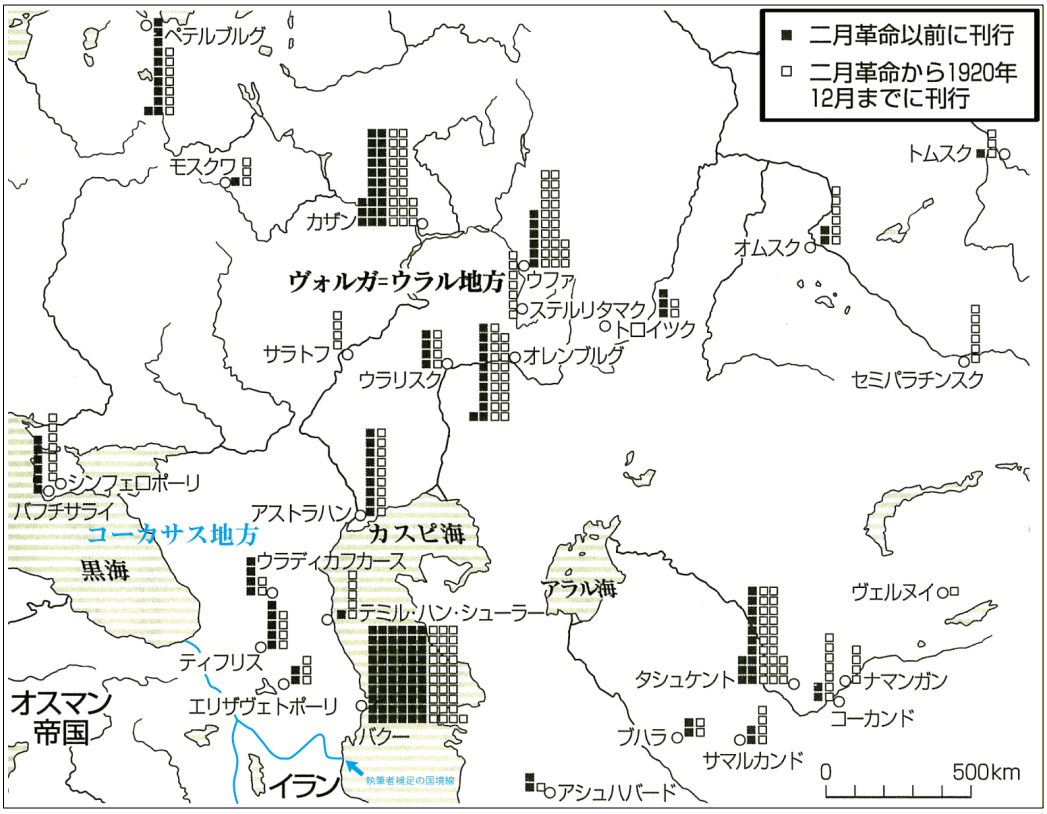


図 1：ロシア革命期に刊行されたムスリムの新聞・雑誌の地域分布図

出典：小松久男編.『中央ユーラシア史』（世界各国史）. 山川出版社, 2000.10, p. 394 の地図に加筆。

（A.Bennigsen et Ch. Lemercier-Quelquejay, *La presse et le movement national chez les musulmans de Russie avant 1920*, Paris-La Haye, 1964, pp.216-217 の地図を基に作成）

題名のモッラー・ナスレッディンとは、中央アジアからトルコまで、トルコ系の人々の間に伝わる有名なとんち話の主人公であり、トルコ語ではナスレッディン・ホジャの名前で知られている。このトルコ語説話集は、護雅夫訳『ナスレッディン・ホジャ物語―トルコの知恵ばなし』（平凡社・東洋文庫、1965 年）として刊行されているので、読まれた方も多いにちがいない。モッラーやホジャは「坊さん」あるいは「先生」などと訳すことができる。いずれにしても庶民から見れば、一目おくべき知恵者、教養人ということになる。この人生経験豊かな知恵者は、表紙を飾る風刺画の中にもしばしば登場し、テーマに応じて様々な表情を見せる。

『モッラー・ナスレッディン』は、アラビア文字を用いたアゼルバイジャン語（アゼリー語）の週刊雑誌で、1906 年 4 月 7 日（これはかつての露暦で、現在の西暦からは 13 日遅れていた）に創刊され、1917 年のロシア革命の混乱で一時停刊したが、1921 年イラン領内のタブリーズで復刊し、その後ソヴィエト・アゼルバイジャンのバクーで 1922～31 年の間刊行された。巨大な革命をはさんで存続した長寿の雑誌といえる。アゼルバイジャン語を話す人々は、コーカサス南部からアラス川を越えたイランの西北部に住んでいる。この地域は 19 世紀の初めにロシアがイランとの戦争に勝ってアラス川以北を領有するまでイランの領土であり、新しい国境線ができた後も、人々の往来が途絶えることはなかった。とくにロシア領内には過酷な労働に従うイラン人の姿が多く見られた。したがって、『モッラー・ナスレッディン』はロシア領内のムスリム地域のみならず、イラン情勢にも目を配り、風刺画にはペルシア語の説明が入ることもあった。イランにおけるガージャール朝の専制を批判した『モッラー・ナスレッディン』は、イラン国内では購読を禁止されたが、ひそかに回覧されて多くの読者を得たという。

『モッラー・ナスレッディン』の創刊者・主筆は、風刺作家のジェリル・メンメトグルザーデ（1866～1932）で、評論家のオメル・ファイク・ネエマンザーデ（1872～1940）や詩人のアリエクベル・サービル（1862～1911）ら、旺盛な批判精神と機知、ユーモアの才にあふれた執筆陣を形成した。コーカサス南部は、ロシア帝国の辺境に位置しながらイスラーム世界の一部をなし、イランやオスマン帝国に接するという地政学的な特徴に加え、さまざまな民族と文化が交錯し、民族運動と労働運動が帝政支配とせめぎあうという地域的な特徴をあわせ持っていた。そこはけっして「辺境」ではなく、むしろ同時代の世界の動向の「焦点」であったと考えられる。『モッラー・ナスレッディン』の批判精神の土壌は、そこに見いだすことができるだろう。その創刊時を振り返ると、ロシアの 1905 年革命はまだ終息しておらず、政治的には長く沈黙していたロシア領内のムスリムも、有志の会合とはいえ、すでに 2 回のロシア・ムスリム大会を開催し、政党の結成や自治の構想、教育をはじめとするムスリム社会の改革をめぐって議論を戦わせていた。イランではカージャール朝の専制に対抗する革命の動きが鮮明となっており、オスマン帝国でも専制に反対して立憲政の回復を求める、いわゆる青年トルコ人革命の胎動が始まっていた。

時代は大きく変わろうとしていた。しかし、自分たちの社会はそれに対応できる態勢にあるのだろうか。答えは、否。『モッラー・ナスレッディン』の風刺は、そこから発する。

『モッラー・ナスレッディン』は８頁からなる雑誌で、その半分を記事、残りの半分をカラーの風刺画に割り当てている。記事は辛口の批評やユーモアに富んだエッセイや詩、ロシア内外の情報、ロシア・ムスリム地域の新聞・雑誌からの短い抜粋などから構成されている。しかし、『モッラー・ナスレッディン』を特徴づけるのは、やはりその当意即妙の風刺画である。発行部数は5000部と言われ、これは当時の雑誌としては少なくはない。雑誌は個人の購読ではなく、複数の読者に回覧されることを想定していた。問題は人々の多くが字を読めなかったことである。『モッラー・ナスレッディン』の風刺画は、このような人々に雑誌のメッセージをわかりやすく伝えることを意図していた。読者はロシア領内に限られず、イランやオスマン帝国の領内にも広がっていた。

この風刺画を描いたのは、初期の段階では二人のドイツ人の画家、オスカル・シンメルリンク（シリング、1863～1938）とヨゼフ・ロッテルであった。彼らはティフリスの美術学校で教師をしていたと推測され、メンメトグルザーデらと意気投合し、雑誌の論調に合わせて当意即妙の画を創作していった。『モッラー・ナスレッディン』の成功の第一の要因は、この風刺画にあった。それがことの核心をついていたことは、当局の検閲によって公開を差し止められる場合があったことからもわかる。このようなとき、『モッラー・ナスレッディン』は当該の頁を空白あるいは×印のみとし、「われわれに関係のない理由により、ここは空白になった」とコメントを入れるのが常であった。差し止められた画にはさぞかしパンチのきいた描写があったことだろう。

以上のように、『モッラー・ナスレッディン』は、記事と画像を織り交ぜながら時代の諸相とその空気を鮮明に伝えてくれる。この地域の歴史を知る、とりわけ社会史を描くには格好の史料といえる。近い将来これを活用した研究が現れることを期待したい。

ケース１：啓蒙と反動

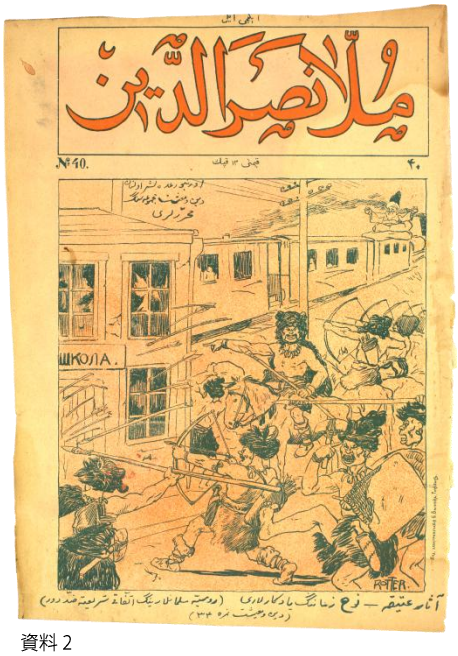
※資料に記載されたタイトルあるいは解説を本文中に赤字で記した。

資料１は、『モッラー・ナスレッディン』創刊号の表紙である。説明はないが、この画の心を読み解く鍵は、窓の外の風景にある。太陽はすでに上がっているのに、室内のムスリムは、一人が寝ぼけて伸びをしているのを除けば、みな枕を並べて熟睡したままである。すなわち世界はすでに動き、進んでいるというのに、世のムスリムたちは何もせず、惰眠を貪っているのではないか、こんなことではいったいこの先どうなることやら、と右手に立つ主人公のモッラー・ナスレッディンは語りかけている。警世を旨とする風刺雑誌の出発を飾るにふさわしい画ではないだろうか。画中のナスレッディンは無言だが、その目や身振りは政治や社会の問題を鋭くついている。画の解釈は、心ある読み手にゆだねられているのである。左下のマークは、風刺画の名手シリングのイニシャル III を表している。

資料１
『モッラー・ナスレッディン』創刊号の表紙
画：シリング
1906 年 04 月 07 日発行, No.1, p.1

しかし、歯に衣を着せない『モッラー・ナスレッディン』の辛辣な論調は、ただちにムスリム保守派やロシア当局の攻撃や警戒を招くことになった。早くも第 4 号の表紙には、こうした勢力から制裁を受けるモッラー・ナスレッディンの姿が描かれている。『モッラー・ナスレッディン』がたえず論戦を挑んだ保守派の代表は、同じくロシア領内のオレンブルグで出ていた雑誌『宗教と生活』であった。イスラームの伝統と慣行を墨守して、改革の流れを阻もうとする『宗教と生活』誌に対して、『モッラー・ナスレッディン』は繰り返し批判の矛先を向けている。資料２の説明には、まず「考古遺物－ノアの時代の遺物」とあり、ムスリム社会改革の象徴ともいえる近代的な学校（ロシア語でシュコーラと書かれている）に、預言者ノアの時代さながらに粗野な攻撃を加える『宗教と生活』誌の論者たちを揶揄している。モッラー・ナスレッディンのまたがる汽車も現代文明のシンボルであり、『宗教と生活』誌の時代錯誤ぶりを際立たせている。二行目には「ロシア・ムスリム連盟はシャリーア（イスラーム法）に反する」という『宗教と生活』誌 34 号の論調が引用されている。それは 1906 年 8 月ニージニ・ノヴゴロドで開催された第 3 回ロシア・ムスリム大会で採択されたロシア・ムスリム連盟の規約に対する批判、すなわちスン

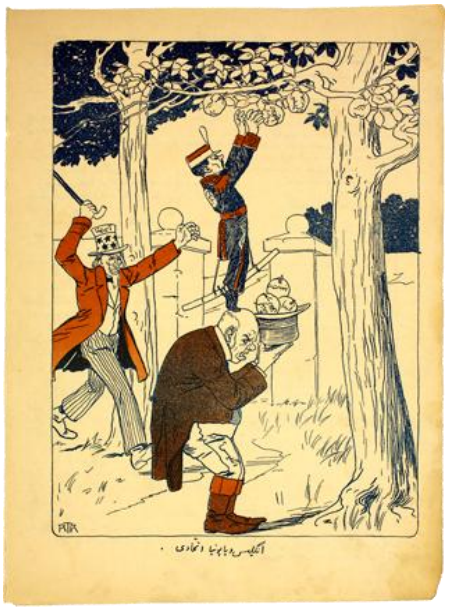
ナ派やシーア派という宗派の違いは問題にならず、ロシア・ムスリムを統括する将来の宗務機構の編成にあたっても障害とはならないという大会の合意に原理原則的な批判を加えた論説の骨子であった。『モッラー・ナスレッディン』は、これに対して論説で反論することはせず、巧みな戯画で切り返したといえる。ちなみに、アゼルバイジャン人の多くは、ロシア領内では少数派のシーア派に属していた。



資料 2
考古遺物－ノアの時代の遺物
画：ロッテル
1907 年 10 月 26 日発行, No.40, p.1

ケース 2：国際関係への眼

『モッラー・ナスレッディン』の眼は、20 世紀初頭の国際関係も的確にとらえていた。資料 3 はイギリス人の頭に乗ったいかにも小柄な日本人が、おいしい果実にたとえられた新しい勢力圏や地位、権益を手にしようとする姿を描いている。日本人が手を伸ばしているのは、左から、「太平洋」、「アジアにおける覇権」、「フィリピン諸島」、「シベリア」であり、イギリス人がすでに帽子に収めているのは、「インド」、「朝鮮」、「中国における覇権」である。このような日英の合作に「けしからん」と怒ってやってくるのがアメリカ人であり、全体として日露戦争後のアジアにおける日英同盟の構図が巧みに描かれている。タイトルには「イギリスと日本の連合」とある。画はロッテルの作。



資料 3
イギリスと日本の連合
画：ロッテル
1907 年 03 月 03 日発行, No.9, p.4

資料 4 の画には「虫の捕獲―ヨーロッパ列強の東方政策」とある。左から、パイプをくゆらすイギリス人はインド、葉巻を吸うフランス人はアルジェリア、ビールを飲むドイツ人はザンジバルの、それぞれ虫にたとえられた民をとらえ、これら植民地をどう「料理」するかを考えている。ここでいうザンジバルとは、ドイツが 1885 年にアフリカ東岸のザンジバル政権を海軍力で威嚇し、英仏と協議の上で獲得した東アフリカ植民地のことをさしている。羽のついた虫も、閉じ込められてしまってはどうすることもできず、西欧列強に生殺与奪の権を握られている。このように『モッラー・ナスレッディン』の眼は、世界に開かれており、帝国主義の時代相をムスリム読者にわかりやすく伝えることに成功していたといえる。画はシリングの作。

このような同時代の国際関係の風刺画は、『モッラー・ナスレッディン』が得意とした題材の一つであり、後続の号にも頻繁に登場している。ロシア帝国とイスラーム世界が交わり、当時世界最大のバクー油田をかかえたコーカサスからは、国際関係の動向がよく見えていたにちがいない。

資料 4
虫の捕獲―ヨーロッパ列強の東方政策
画：シリング
1907 年 07 月 08 日発行, No.25, p.8

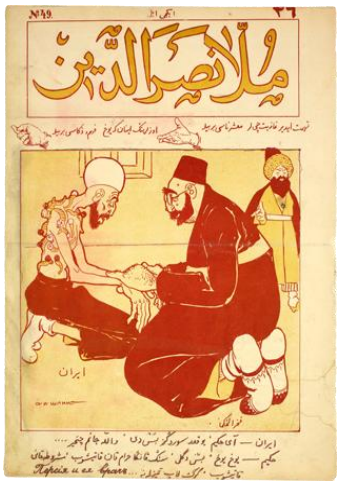
ケース 3：イラン立憲革命への共感と支持

『モッラー・ナスレッディン』が創刊された頃、ロシア領コーカサスに南接するイランでは立憲革命が進行していた。それはカージャール朝の専制と列強への政治・経済的な従属に反対するウラマー（イスラームの知識人）、バザール商人、都市民の抗議行動から始まり、国民議会開設を要求する波が高まった。これに押されて国王ムザッファロッディーン・シャーは憲法勅令を発布し、1906 年 10 月国民議会が開かれ、1907 年 1 月にはイラン最初の憲法基本法が発布された。『モッラー・ナスレッディン』は、当初から立憲革命を擁護し、最新情勢の報道に努めたが、国王支持派の反動とロシアやイギリスの干渉のために革命の果実は失われていく。このような緊張感の中で『モッラー・ナスレッディン』には、立憲革命を題材とする風刺画が次々と登場した。

資料５は、揺りかごに眠る、まさに生まれて間もない「国民議会」を、「つぶしてやるぞ」とばかりに力で威嚇するカージャール朝の高官、すなわち反動派の圧力を描いている。彼らのかぶる、子羊の幼毛を使った高価な帽子には国章のライオンが見える。これに対して、心配そうに幼子をあやす母親の左肩には「イラン」と書かれている。これは立憲派の愛国主義の象徴としてよく使われた言葉「祖国の母　mām-e vatan」を擬人化したものと考えられる。窓から室内をのぞき込んでいるのは、イギリス（左の山高帽をかぶっている男）とロシアであり、立憲革命の帰趨、より正確にはイランにおける権益の拡大と確保に深い関心をもっていた両国を当てこすっている。背景に立つモッラー・ナスレッディンの顔にも憂慮の色が見える。じっさい、1908 年新国王のモハンマド・アリー・シャーは、ロシアの支援で編成されたコサック旅団を使って反革命のクーデタを起こし、議会の解散と憲法の停止を行った。その後タブリーズ市民の武装闘争を皮切りに革命派も反撃に転じ、1909 年には立憲制の回復に成功するが、1911 年ロシアの軍事干渉によって立憲革命は未完に終わる。

資料５
無題
画：シリング
1907 年 03 月 31 日発行, No.13, p.1

資料６は、患者と医師の会話である。タイトルはロシア語で「イランとその医師」。
イラン「先生、こんなに吸ってもらったら、もうたくさん。死んじゃいますよ」（イランに例えられた男は、病気治療のために蛭（ひる）を使った瀉血療法を受けている）
名医「いやいや十分ではありませんな。あんたの血にはご禁制の血、立憲制の血を入れて、すっかりきれいにしなければなりませんぞ」



資料６
イランとその医師
画：シリング
1907 年 12 月 30 日発行, No.49, p.1

専制と外圧という病魔に冒されたイランを再生するには、立憲制という新しい血を入れて「健康」を取り戻さなくてはならないというメッセージである。これらの風刺画が伝えるように、『モッラー・ナスレッディン』は立憲革命の雄弁な目撃者であった。画はいずれもシリングの作。

ケース４：ムスリムとアルメニア人

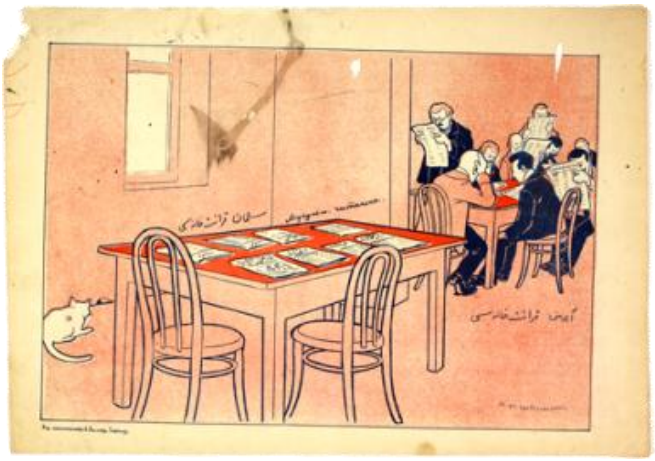
さまざまな民族と宗教が混在するコーカサスは、民族間の対立や緊張の契機をはらんでいた。とくにバクーの石油産業が発展するとともに社会経済的な対抗関係は厳しさを増し、1905 年のロシア革命によって労働運動や民族運動が高まりを見せると、大規模な民族衝突が起こった。1905年２月バクー近郊でイスラーム教徒のアゼルバイジャン人とキリスト教徒のアルメニア人との間に騒乱事件が起こると、それはティフリスやエレヴァンなどにも波及して双方の殺戮と破壊が繰り返された。タタール人・アルメニア人戦争とよばれるこの騒乱の背後には、革命運動から人々の目をそらすために民族衝突をあおった帝政当局の策謀があった。

1907 年 3 月に出た資料 7 は、このような状況をふまえて描かれたと思われる。画の解説には次のようにある。「むかしむかし、世界にはアッラーのほか誰もいなかった。しかし、一人の愚かなアルメニア人と同じく愚かなムスリムがおり、そのほかに悪魔がいた。ある日、この悪魔にも居場所はなくなった」と。悪魔は、激しく渡り合うアルメニア人とムスリムの姿を見て喜び、あおるのだが、両者が和解すると退散せざるをえなくなる。『モッラー・ナスレッディン』は、一方の側に立つことなく、凄まじい暴力が発揮される民族対立の愚かさと不毛を訴えているように読める。あえてタイトルをつけるとすれば、「ムスリムとアルメニア人の戦争と平和」となるだろうか。悪魔が誰であるかは言うまでもない。画はロッテルの作。

資料 7
むかしむかし、世界にはアッラーのほか誰もいなかった。しかし、一人の…
画：ロッテル
1907 年 03 月 31 日発行, No.13, p.8

資料 8 は、ムスリムとアルメニア人の比較をしている。題名は「ムスリムの読書室とアルメニア人の読書室」。この時代コーカサスの諸都市には新聞を自由に読めるサロンや喫茶店が開かれていた。奥に見えるアルメニア人のサロンは新聞を読みふける人々で満席となっているが、手前のムスリムの読書室（ロシア語でも Мусульм.читальня と書かれている）に読む者の姿はなく、ネコがいるのみ。ちなみに、机の手前角に置いてあるのは、ほかでもない『モッラー・ナスレッディン』である。ムスリムの新聞・雑誌には、ロシア当局の検閲のほか、十分な読者を得られないために短命に終わる例も少なくなかった。教育をはじめとして知的な活動に関

心を向けようとしないムスリムは、アルメニア人など他の民族に後れを取るばかりではないか、というメッセージが込められている。ムスリム同胞の無知と怠慢を見事に描いてみせた一枚。なお、『モッラー・ナスレッディン』の挿画は、ネコやイヌ、ネズミ、ロバなど動物の扱い方もうまかった。画はシリングの作。



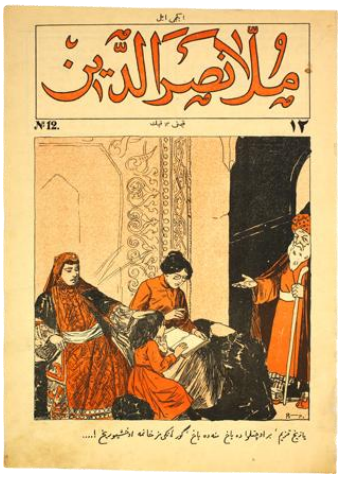
資料 8
ムスリムの読書室とアルメニア人の読書室
画：シリング
1907 年 12 月 23 日発行, No.48, p.8

ケース 5：ムスリム女性へのまなざし

この時代のムスリム社会では男性優位の家父長制が支配的であった。このような現状に目を向けた『モッラー・ナスレッディン』は、さまざまな視点からムスリム女性の姿をとらえている。資料 9 は自分の娘や孫ほども若い嫁を迎えた老人の姿を描いてリアルである。上の画には「最初はこうなる」、下の画には「最後はこうなる」との解説があり、若い嫁をめとってもなすすべのない老いた夫を見捨てて若い男に走る嫁というストーリーになっている。これはメロドラマではなく、未成熟の少女を嫁に出す、あるいは嫁にとるという旧習への批判である。この時代、幼年婚に対する批判は、コーカサスのみならず、ロシア・ムスリム地域の各地で革新派（ジャディード）知識人によって唱えられていた。しかし、およそ女性の権利擁護と解される主張は、ムスリム保守派の激しい反発を買うのが常であり、主筆のメンメトグルザーデも身の安全をはかるために、ティフリスのムスリム街区からキリスト教徒街区に転居することを余儀なくされたという。画はシリングの作。

資料 9
『最初はこうなる』、『最後はこうなる』
画：シリング
1907 年 06 月 25 日発行, No.23, p.8

資料 10 は、女子教育に関わるメッセージを伝えている。本を読む娘の母親は、こう話しかけている。「かわいそうな子ね、女教師と私を比べてごらん。どちらが女らしいかしら！」と。娘にとって必要なのは教育ではなく、将来の結婚に備えての女らしさだという当時の通念が、「これでよいのか」と揶揄されている。女子教育への理解のなさは、『モッラー・ナスレッディン』がしばしば取り上げるテーマであった。なお、この母親の衣装は、自宅にいるにもかかわらず派手であることがわかる。これも、富裕層の家長たちが自らのステータスを示すために夫人に豪奢な衣装や装身具を与え、夫人たちもまた公衆浴場に行くときもそれらを持参して贅を競うという虚栄心への批判と読める。ちなみに、『モッラー・ナスレッディン』の別の号には、こうした高価な装身具を目当てに公衆浴場を襲った盗賊の例が描かれている。資料 10 の画はロッテルの作。



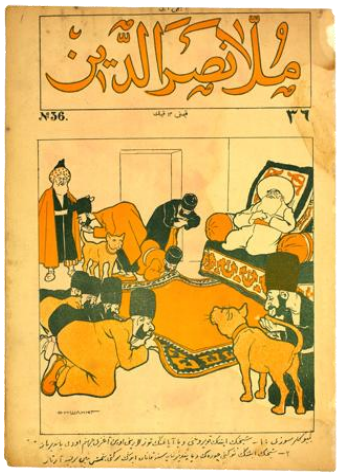
資料 10
かわいそうな子ね、女教師と私を比べてごらん。どちらが女らしいかしら！
画：ロッテル
1907 年 03 月 24 日発行, No.12, p.1

ケース 6：旧弊の暴露と告発

『モッラー・ナスレッディン』は、ムスリム社会にはびこる旧弊を暴露し、これを告発することにかけても抜群のセンスを発揮した。

資料 11 は、シェイフ、すなわちスーフィー教団の長などの尊師に対する盲目的な服従の愚かさやシェイフの権威の荒唐無稽さを揶揄している。解説にはこうある。

「尊師のお言葉：1．シェイフの犬の尻尾もしくは足のほこりをなめた者の口は、地獄の業火も焼くことはない。2．シェイフの犬の毛をパンやチーズの酵母に加えた家の幸福は7万倍に増す。シェイフ・ハミト・パシャ」と。『モッラー・ナスレッディン』は、信徒からの寄進により労せずして富を手にいれ、尊大にふるまう尊師たちをこきおろすとともに、彼らに盲従する信徒たちにも覚醒を求めている。富と名声を求めるばかりの宗教権威への挑戦は、『モッラー・ナスレッディン』の終始一貫したテーマの一つであった。画はシリングの作。



資料 11
尊師のお言葉
画：シリング
1907 年 09 月 24 日発行, No.36, p.1

資料 12 は、中央アジアの古都ブハラにおけるラマダン（断食）月の娯楽の様子を描いている。ブハラは帝政ロシアのトルキスタン侵攻以来その保護国となっていたが、古来中央アジアにおけるイスラーム教学の中心地として尊敬を集め、「聖なるブハラ」という美称を享受していた。イスラームの神学や法学を講じる多数の学院（マドラサ）を擁し、つねに数万もの学生が学ぶ都市ともなれば、そこには理想的なムスリム社会が期待されてしかるべきである。しかし、現実はまったく異なっていた。神聖なラマダン月にマドラサとおぼしき建物の前でブハラ人が打ち興じている娯楽とはいったい何か。かたや美少年の踊りに恍惚となる男たち、かたや双六に熱中する男たち。タイトルには「聖なるブハラにおけるラマダン神聖月の娯楽」とある。ブハラの惨憺たる実状は『モッラー・ナスレッディン』がしばしば取り上げたテーマであり、君主であるアミールの専制や堕落、ロシアへの従属の深まりに警句を発している。こちらもシリングの作。

資料 12
聖なるブハラにおけるラマダン神聖月の娯楽
画：シリング
1907 年 12 月 02 日発行, No.45, p.4

ケース 7：日常に向けた批判の眼

資料 13 は、「コーカサスのムスリム神学校」と題した画である。ここでは次世代を担うべき生徒たちの劣悪な教育環境が描かれている。数名の子供が本を開いているだけで、眠りこけた教師を尻目に、生徒たちは勝手に遊び、あるいは居眠りをしている。今風に言えば、学級崩壊となるだろうか。しかも「校舎」は家畜小屋と共用となっており、臭気がこもりハエが飛び交う様も容易に想像できる。授業のさなかに眠りこける教師や、生徒に手ひどい折檻を加える教師の姿は、『モッラー・ナスレッディン』にしばしば登場しており、このような風景は日常茶飯となっていたことがうかがわれる。19 世紀の末からロシア領内のムスリム地域では教育改革をめざすジャディード運動が始まったが、その道は遠く険しいものであったことがわかる。画はシリングの作。

資料 13
コーカサスのムスリム神学校
画：シリング
1906 年 04 月 21 日発行, No.3, p.1

最後の資料 14 は、不当な権力や空虚な権威などの不条理にすべからく異議を唱えた『モッラー・ナスレッディン』の真骨頂を示した一枚。説明には「われわれが毎日見ていること」とある。いかにも気楽にかまえたロバをかついで歩く男たちの足どりは重い。一般にコーカサスを含む中東イスラーム圏で、ロバは愚か者の代名詞であり、罵倒の言葉としてもよく用いられる。身分が高い、資産がある、あるいは学識があるとされても、じつは無学で愚か者のために民衆は日々苦労をしいられているという現実を皮肉った風刺画である。解説はなくとも、見た者にはすぐにわかったにちがいない。画はロッテルの作。

資料 14
われわれが毎日見ていること
画：ロッテル
1907 年 03 月 10 日発行, No.10, p. 4

付記：資料 5 の解説については、テヘラン大学のマンスール・セファトゴル教授の教示を得た。ここに記して感謝申し上げたい。

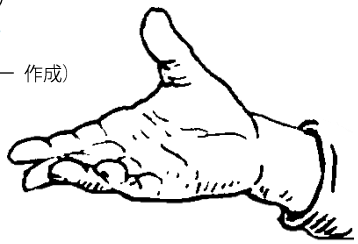
展示資料一覧

展示資料は全て、『Molla Nasreddin (Mulla Nasr al-Din)』に掲載されたものです。以下の一覧には、その発行年月日、号・ページを記載しています。

資料 No.	タイトル	発行年月日	号・ページ
1	『モッラー・ナスレッディン』創刊号の表紙	1906 年 04 月 07 日	No.1, p.1
2	考古遺物－ノアの時代の遺物	1907 年 10 月 26 日	No.40, p.1
3	イギリスと日本の連合	1907 年 03 月 03 日	No.9, p.4
4	虫の捕獲―ヨーロッパ列強の東方政策	1907 年 07 月 08 日	No.25, p.8
5	無題	1907 年 03 月 31 日	No.13, p.1
6	イランとその医師	1907 年 12 月 30 日	No.49, p.1
7	むかしむかし、世界にはアッラーのほか誰もいなかった。しかし、一人の…	1907 年 03 月 31 日	No.13, p.8
8	ムスリムの読書室とアルメニア人の読書室	1907 年 12 月 23 日	No.48, p.8
9	『最初はこうなる』、『最後はこうなる』	1907 年 06 月 25 日	No.23, p.8
10	かわいそうな子ね、女教師と私を比べてごらん。どちらが女らしいかしら！	1907 年 03 月 24 日	No.12, p.1
11	尊師のお言葉	1907 年 09 月 24 日	No.36, p.1
12	聖なるブハラにおけるラマダン神聖月の娯楽	1907 年 12 月 02 日	No.45, p.4
13	コーカサスのムスリム神学校	1906 年 04 月 21 日	No.3, p.1
14	われわれが毎日見ていること	1907 年 03 月 10 日	No.10, p.4

展示資料の公開ページ一覧

本学アジア・アフリカ言語文化研究所 文献資料室が所蔵する『モッラー・ナスレッディン』は、インターネット上で公開されており、今回ご紹介できなかった部分もご覧いただけます。

資料 No.	公開ページ（URL）
1	http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/pages/1906_04_07/01.html
2	http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/pages/1907_10_26/01.html
3	http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/pages/1907_03_03/04.html
4	http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/pages/1907_07_08/08.html
5	http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/pages/1907_03_31/01.html
6	http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/pages/1907_12_30/01.html
7	http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/pages/1907_03_31/08.html
8	http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/pages/1907_12_23/08.html
9	http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/pages/1907_06_25/08.html
10	http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/pages/1907_03_24/01.html
11	http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/pages/1907_09_24/01.html
12	http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/pages/1907_12_02/04.html
13	http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/pages/1906_04_21/01.html
14	http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/pages/1907_03_10/04.html

『モッラー・ナスレッディン』紙デジタルアーカイブ
http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/
（アジア・アフリカ言語文化研究所 情報資源利用研究センター 作成）